

第4章

中ノ俣集落

第4章 中ノ俣集落

4-1 中ノ俣集落にみる近代化

4-1-1 集落の現在

高田市街地の西方、山あい位置する中ノ俣集落は、多い時には積雪4メートルを超える豪雪地域であり、茅葺屋根の残る山間集落として以前から注目されてきた。かつては「中ノ俣百戸」と呼ばれ、100戸あまりの集落であったが、1970年代以降戸数、人口ともに減少を続け、現在の戸数は54戸、114人である^(注1)。特に若・青年層の減少は甚だしく、他の農村集落同様、高齢化が進んでいる。

4-1-2 中ノ俣の農家

中ノ俣集落の農家に関しては既に報告が行われているので^(注2)、ここでは簡単な紹介にとどめる。中ノ俣地域で見られる代表的な農家形式は、『越後の民家 上越編』によると中門造である。

中門造とは、本屋に中門が前面もしくは背面に棟を替えてつく農家形式である。中門が本屋から鍵状に折れ曲がっているため、雪などの荷重に対して強靱であると考えられ、豪雪寒冷地でよくみられる。本屋の前面に中門がつくこの地域の前中門造の場合、一般的には中門がつく下手には、手前はニワ(作業空間)・ウマヤ(飼育空間)があり、その後方にはダイドコ(水廻り/食事/家族空間)がある。中央にはチャノマ、上手にはザシキ・デイがくる。また、棟の高さが本屋・中門ともに揃い、寄棟屋根をもつ場合もあるが、平面の使い方には大きな差はみられない。構造面からみると、太い柱梁で構成された上屋と、それを囲む下屋からなる下屋造が大半を占める^(注3)。

母屋以外の付属屋では、いくつかの家に木小屋が確認された。この地域で古材の転用が多いことは既に指摘されているが^(注4)、古材の需要

と供給は必ずしも時期的に一致するわけではない。木材の調達が困難であるのはもちろんのこと、豪雪に耐える太い材は貴重である。そのためにも常に解体の後、不要となった木材を貯えておく必要がある。また豪雪地帯特有の特徴として、積雪時期になると窓などの開口部を覆う、雪覆いのための板も必要である。このための木材が、各戸床下や木小屋などにストックされていると考えられる。

このことは、豪雪地域の農家に共通する点とも考えられ、農家の維持継続を考える上で、重要な背景といえる。



図4-1 床下に収納されている木材

4-1-3 集落における近代化

生活、生業の変化により、また建物の老朽化により、建て替え・改造・改修が行われることは当然であり、ここ中ノ俣でもいくつかの変化が見られる。そこで、今回行った全棟調査より、連続屋根伏図(図4-7)を作成し、中ノ俣地域における近代化を考えてみる。全域の調査は昭和58年(1983)に行われているが^(注5)、既に20年近くが経過しており、また改造面での報告がなされていないため、この調査結果も参考資料として扱うこととする。

まず、この連続屋根伏図をみてわかる顕著な特徴は、茅葺屋根を鉄板で覆う屋根改修である。

本調査の時点では、茅葺屋根をもつと思われる建物が61棟確認された。そのうち、56棟は屋根全面が鉄板で覆われており、一部でも茅葺屋根を維持している建築は、5棟に過ぎない。その5棟に関しても、近年葺替を行った形跡はなく、積極的に維持しているようには見受けられなかった。しかも、そのうちの2棟は空家とみられる。

鉄板葺にすれば雪降ろしが必要ないうえ、葺替というメンテナンスも不要であるのはもちろんのこと、その背景には、茅材・葺替技術者の不足という材独自の問題も、原因のひとつと考えられる。このような現象は、中ノ俣に限ったことではなく全国的な現象であるが、前回の調査時の写真と比較しても、ここ2、30年の間に急速に進んでいることが解る。

さらに、大屋根が鉄板で覆われていると同時に、その周囲に小さな差掛の屋根が多数存在することがわかる。下屋部分の改造、例えば水廻りの改造やサッシの交換は、ほとんどの農家で行われているようである。これは、住宅内の居住性能を上げるための、小さな工夫とみるべきであろう。



図4-2 差掛屋根をもつ農家

次に、より大きな変化である建物全体に目を転じて考えてみる。まず、取り壊して新しい建物に建て替えられる事例が挙げられる。他地域に比較すると少なく感じられるが、数棟でみられた。川崎家のように、近年行われた道路整備がきっかけになり、新築したと思われる場合も

ある。また、北島家のように形式としての中門造の形はそのままに、屋根の葺材を茅ではなく鉄板としている事例がある。今回の調査では、内部調査や聞き取りを行っていないため、この建物が茅葺屋根を持つ中門造農家の大幅な改修なのか、古材を転用して造られたのか、全くの新築なのか、外観のみで判断することは難しい。古材の転用実態を探る上でも、さらなる調査、検討が必要である。



図4-3 北島家

次に、改造の事例をみてゆきたい。大改造の方法として、ここ中ノ俣地域でよく見られる、半分壊して改造する事例を考えてみる。このような、大規模な改造が行われたと考えられる農家は14棟確認できた。それらを分類すると、下手を中心とした改造と、上手を中心とした改造の2つのパターンに分けることができる。

下手の改造の場合、動力の変化により馬が不要となることから、ウマヤ部分をニワと一体化して、土間・作業・物置などの作業空間の近代化が行われる場合、あるいはガイドコを中心とした、水廻りの近代化が考えられる。しかし、改造が行われても生業の変化がないためか、中門造の形式をそのまま残し、玄関奥には広い作業用土間がとられる場合が多い。

一方、上手を中心とした改造の場合、ザシキの居室・生活空間としての近代化が考えられる。改造部分は農家形式を残している事例は少なく、居室化された通常の2階建となる場合が多い。



図 4-4 下手改造の農家



図 4-5 上手改造の農家

また、この他にも部分改造が随所で行われている。具体的には、梁行屋根の一部を切り上げて、窓を設ける改修が多数見られるが、これはチャノマの明り取りのためと考えられる。

今回の調査では、改造のいくつかのパターンを見出すことができたが、ここ中ノ俣で生活する者の生業に変化が少ないためであろうか、改修・改造後も「ニワ」である土間空間を継承する事例が多数確認された。逆に考えれば、生業を変えても、なおこの地に留まりつづける事例は少ないのであろう。また、具体的な改造時期・その要因までを辿ることは、今回の調査では不可能であったため、十分な考察を行うまでに至ることができていない。家を交換するエガ工(家替)や移築の指摘は既に行われており(注6)、これらの問題を含めて近代における改修・改造過程を辿ることは、中ノ俣の問題のみならず、山

間部の農村集落における近代化の一事例としても重要であり、さらなる調査が今後の課題となる。



図 4-6 屋根を切り上げて設けられた窓

注

注 1 : 平成 13 年 3 月 31 日現在の住民基本台帳より

注 2 : 『越後の民家 上越編』新潟県教育委員会、昭和 55 年

西和夫「上越市中ノ俣の民家と集落」『建築史研究の新視点 二 建築と民俗・芸能・技術・地震』中央公論美術出版、平成 13 年(昭和 55 年より 10 年間、調査が行われた)

注 3 : 『日本の民家 第二巻農家 II』学習研究社、昭和 55 年

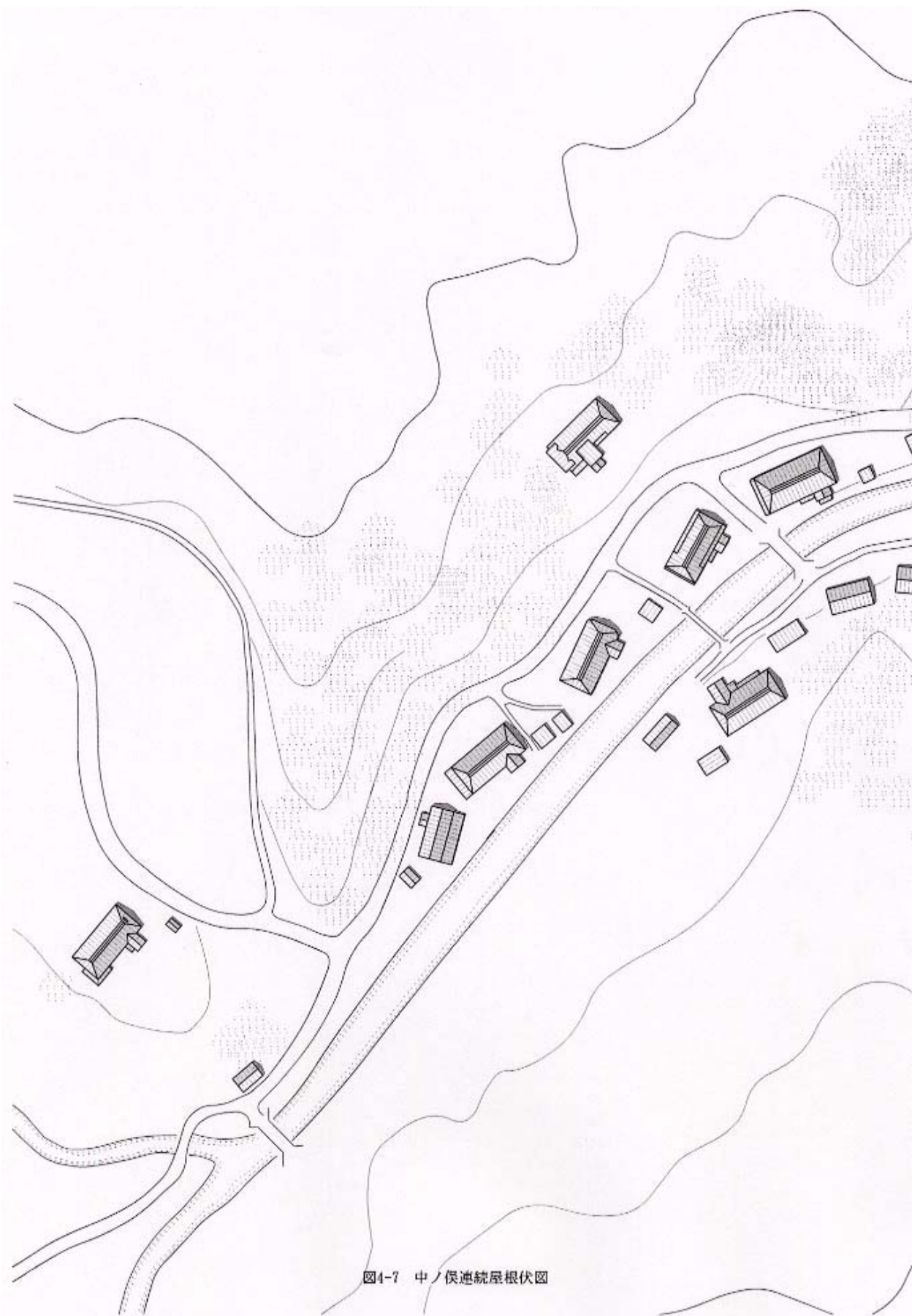
吉田靖『日本の美術 60 民家』至文堂、昭和 46 年

『民俗建築大事典』柏書房、平成 13 年

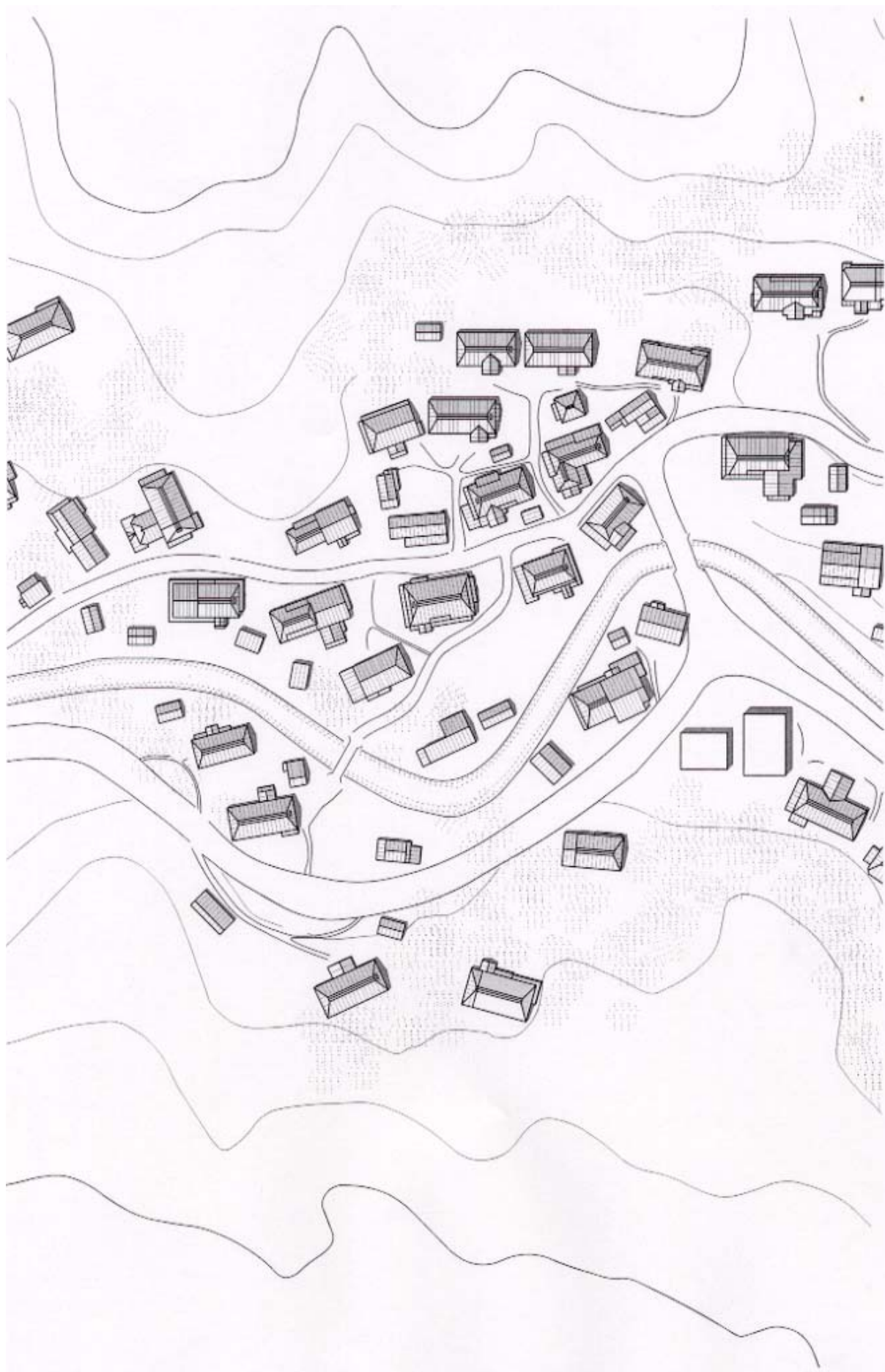
注 4 : 前掲「上越市中ノ俣の民家と集落」

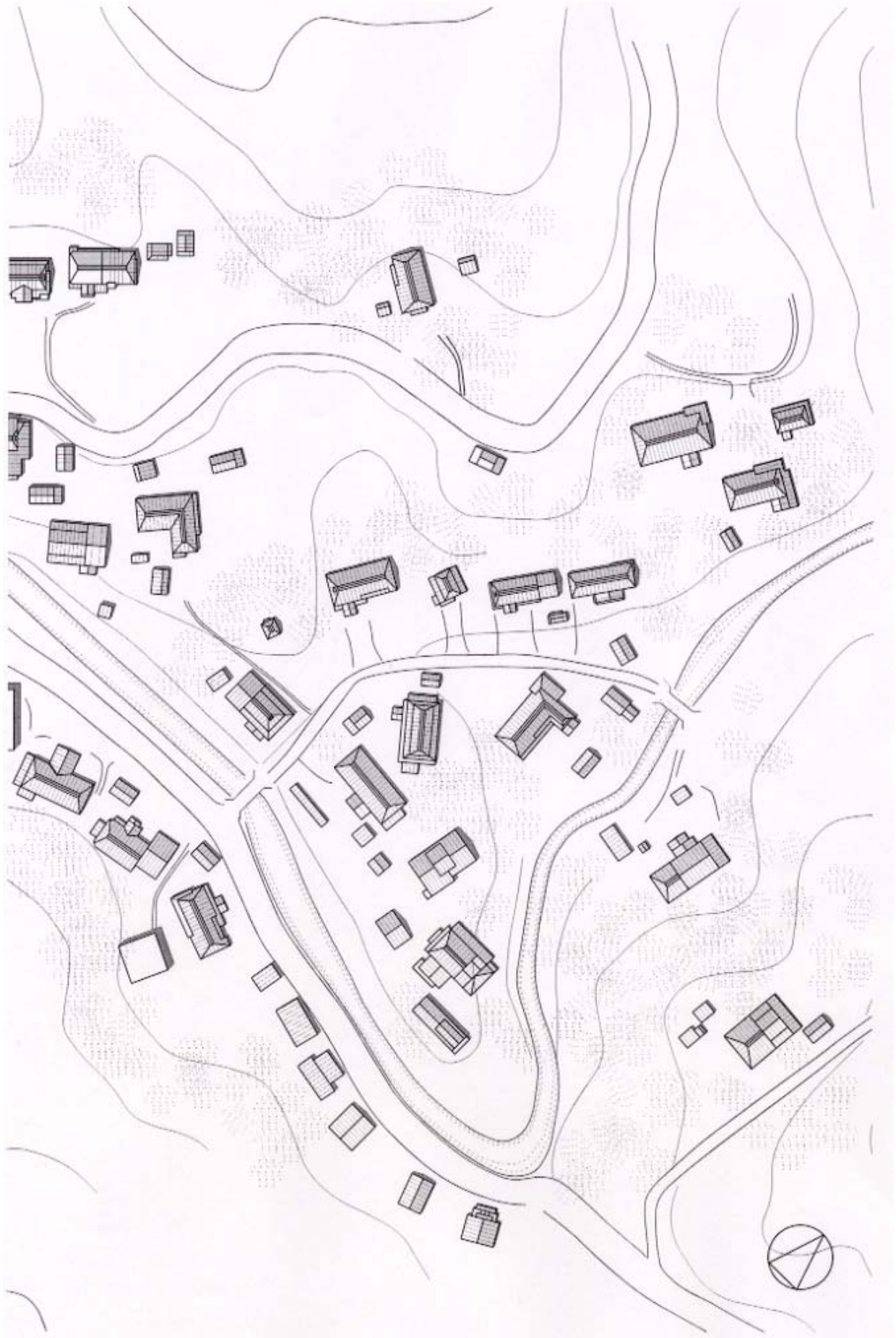
注 5 : 前掲「上越市中ノ俣の民家と集落」

注 6 : 前掲「上越市中ノ俣の民家と集落」









4-2 農家実測（下室ミチ家住宅）

中ノ俣で最も古い住宅といわれ、建築年代は18世紀中期もしくは19世紀前半と推定されている。下室政勝家住宅として既に『越後の民家上越編』（昭和55年）に紹介されているが、現在は下室政勝氏の未亡人ミチさんが一人で暮らしている。昭和55年のころと比べると、生活にあわせるための改変が加えられている。今回の調査（2001年6月21日）においては、実測による平面図・立面図・断面図の作成、およびミチさんからの聞き取りを行った。

4-2-1 構造・平面

屋根は寄棟造（平入）茅葺である。ただし、茅の上からトタン板をかぶせてある。中ノ俣では山に個人の茅場があり、茅を刈ってくるのは女衆の仕事であった（男衆は炭をつくるのが仕事であった）。刈ってきた茅は干してから屋根裏に貯めておき、必要に応じて葺替を行ったという。下室家の場合、トタンを被せたのは昭和50年頃のこと、その理由は「（茅を）刈るのヤダし、（トタンの方が）雪も滑る」からであった。

東南を正面とする。桁行9間、梁間4間で、正面出入口前に切妻形の張出しをつける。間取は方三間のチャノマ（当室のみ長押が廻される）を中心とし、その奥にネマ、上手に2室からなるデイ（現在は3室に分れる）下手にウマヤをもつニワ（土間）、その奥にナカマ、ナガシを配している。中心にあるチャノマの天井は竹簀子が張られており古風である。この室には大きな神棚がある。同室の中央付近には今でも天井から自在鉤が釣られており、この位置にもともとは囲炉裏があったことが判かる。デイは「九尺ないからザシキとはよばない」とのことであった。現在ではオクデイ背面寄りに床の間が増設され、仏壇が置かれている。

下室家住宅において特に興味深いのは小屋裏に幾層にもわかれて展開される空間で、ウマヤの上部のものは藁細工などの作業を行うための

場所であったといい、いまでも藁細工用の道具や藁で編まれた靴などが放置されている。チャノマ上部に相当する最も広い空間は茅を保管する場所であったようで、現在も茅がわずかながら残されている。

構造は上屋と下屋からなる。チャノマの上部には桁行方向にチョウナによるハツリのある大梁が渡され、下屋柱との繫梁には湾曲した材が用いられている。柱の仕上げはカンナであるが、一部見隠れはチョウナである。小屋は叉首構造による簡略なものであるが、そのために上述のように倉庫として利用することが可能になっている。

4-2-2 改造の経緯

ミチさんによると、もともとは「曲屋」で近くにある宮本家住宅のような形態であったという。また、「マゴバアチャンがトイレで馬に肩を噛まれた」という記憶があることから、「曲屋」では馬を飼っており（ウマヤの箇所は土間面より一段低くなっていたという）そのすぐ脇に便所があったようである。大正14年（1925）に現在のような平面に改められたという。

昭和46年にそれまで飼育していた牛を売り払い、ウマヤが不要となった。30年前（昭和50年頃）に土間床をコンクリート敷に改めた。同じ時に屋根にトタンを被せており、そのほかにもさまざまな改変がおこなわれたようである。

また、ごく近年にチャノマの床板が新調されてフローリングとなった。その上に畳を敷くこともあるようで、チャノマ内に畳が積み上げられている。ナカマの天井も最近の改造でプラスチックボードとなっている。

このほか、背面にある奥行半間の張出しは後世の増築で、入側筋の柱に間渡が入っていた痕跡が認められる。オクデイの奥につけられた床の間（仏壇が置かれる）も後世の増築によるものである。また正面入口右脇の物置の部分も近年に増築されたもののようで、部材は新しい。

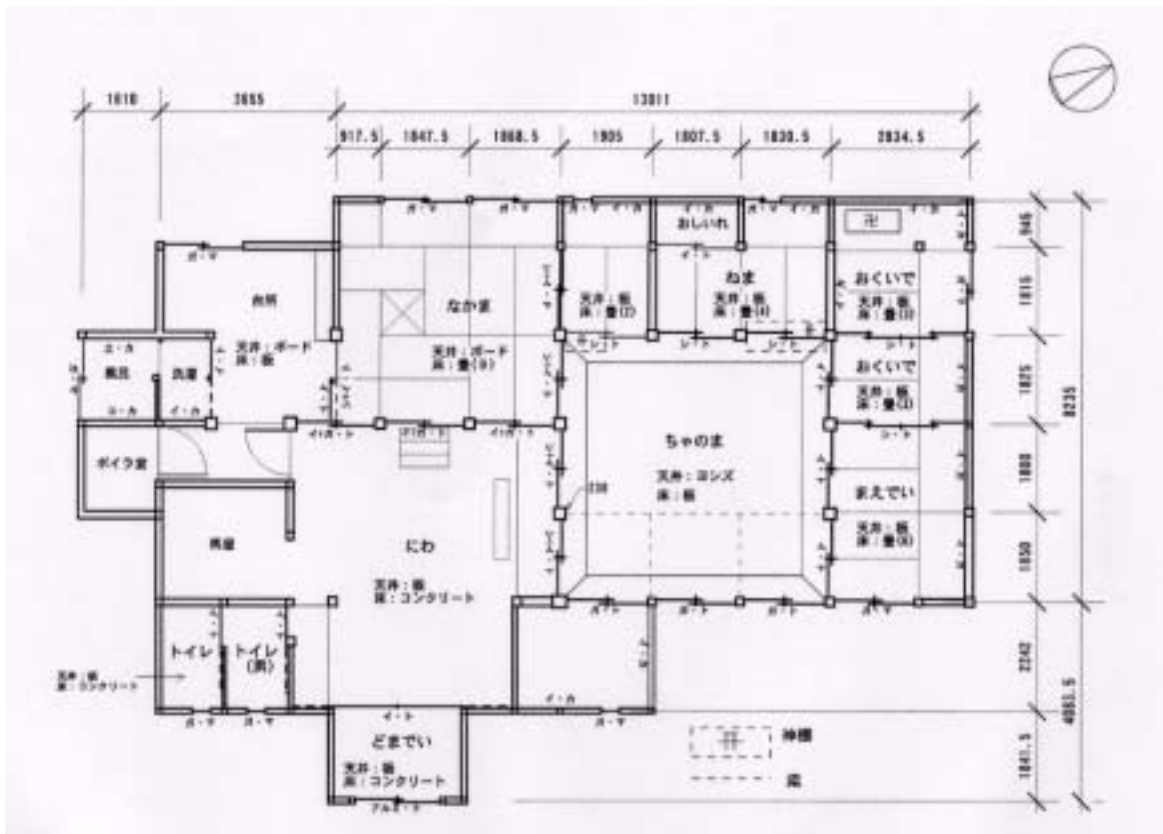


図 4-8 下室ミチ家平面図

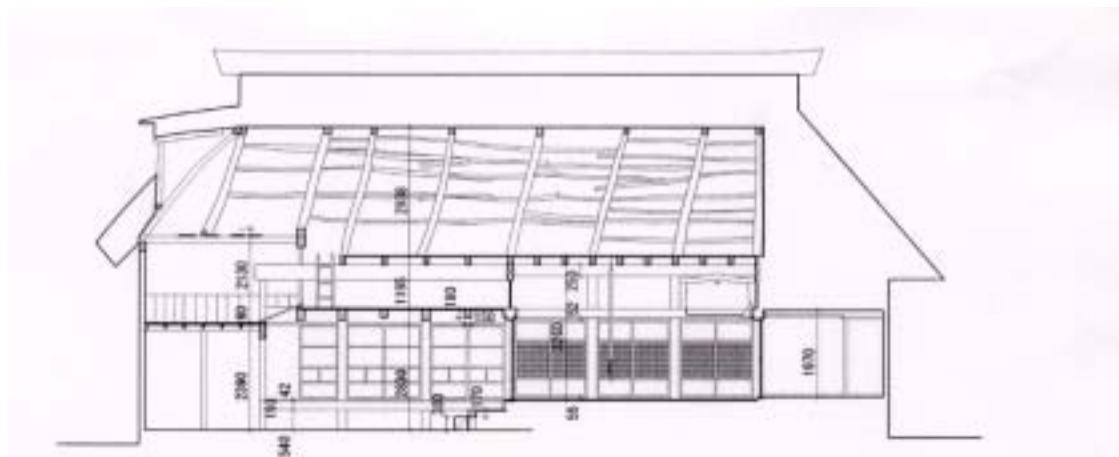


図 4-9 下室ミチ家桁行断面図

SCALE 1:150





图 4-10 下室三子家正面图

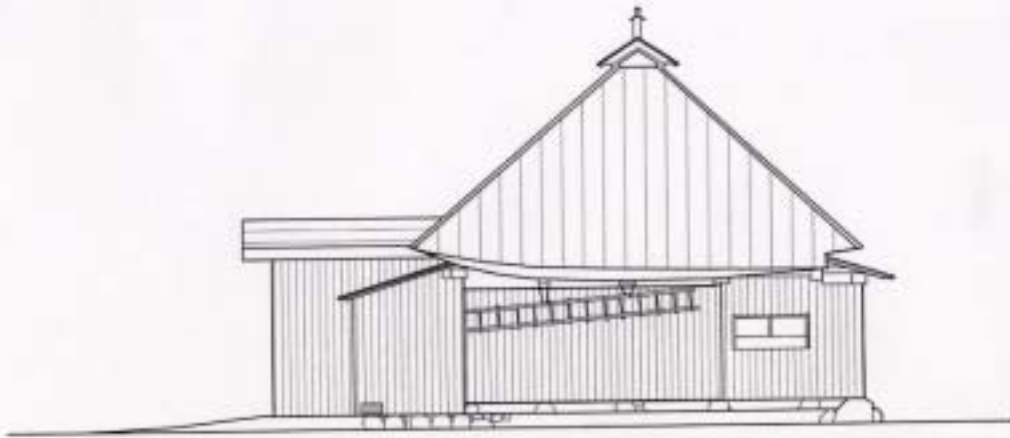


图 4-11 下室三子家側面图

SCALE 1:150





図 4-12 外観

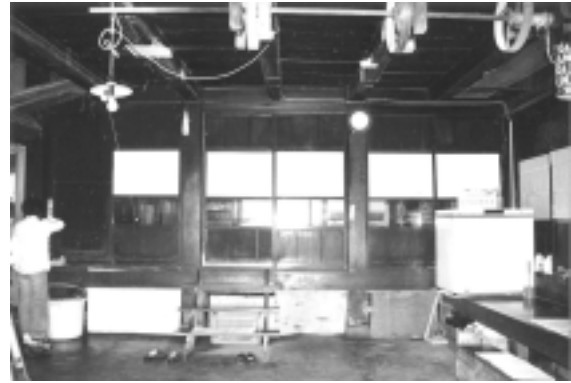


図 4-13 ニワよりナカマをみる



図 4-14 チャノマ



図 4-15 チャノマの架構



図 4-16 オクデイ



図 4-17 小屋裏